

ミャンマーからの声に導かれ  
—泰緬鉄道建設に従事した父の生涯

内容紹介

著者の父である木下幹夫氏は、阪急電鉄に勤務する鉄道技師でした。その技術を見込まれて1940年に現役兵として徴集されてから鉄道連隊に所属し、ビルマ（現ミャンマー）で鉄道建設や駅長の仕事に従事しました。とくに大きな仕事となったのが、映画「戦場にかける橋」の舞台となった泰緬鉄道（415km）の建設です。

泰緬鉄道はタイとビルマを結ぶ鉄道としてイギリスが計画しましたが、建設が困難であると放棄していたものです。タイからビルマへの海上輸送が制海権を失い危険になったので、陸上輸送路として泰緬鉄道を物資の補給のため建設することになりました。泰緬鉄道は別名、「死の鉄道」と呼ばれています。それはあまりにも過酷な環境で短期間に建設しようとしたため、現地労働者や捕虜まで動員し、過労や熱帯病で4万人もの死者を出したからです。捕虜の虐待などがあり、それは戦後遺恨となって伝えられましたが、木下氏は捕虜に一度も暴力をふるったことがないと語っています。それどころか、イギリスが5年を要すると見込んだ鉄道建設をわずか1年4カ月で成し遂げ、捕虜たちと別れるとき、「サンキュー」と握手して別れたといっています。

ビルマの日本兵が真の地獄を味わうのはその次の展開です。インパール作戦という無謀な作戦が立案され、兵站計画もないままに兵士だけが前線へと送られていきました。しかし大河や高山に阻まれ、多くの兵士が飢餓と熱帯病で命を落としました。そのころ木下氏は最前線の駅長でした。そこで毎日、護送されてくる傷病兵が死んでいくのを目の当たりにしました。自分たちも毎日の空襲で逃げ回る日々でした。そんなとき、ビルマの人々がかくまってくれたり、食糧を分けてくれたりしました。木下氏は彼らと意思疎通を図りたいと思い、短期間でビルマ語をマスターしました。

戦後、木下氏は復員し、阪急電鉄に復職しながら地域活動を熱心に行いました。死んでしまった戦友たちの分も、祖国のために働こうという思いからでした。そして1976年からミャンマーに慰霊に出かける旅が始まりました。40年間に27回もミャンマーの地を訪れ、慰霊をおこなったのです。途中からは、1人でも慰霊に旅立ちました。最後に出かけたのは95歳のときでした。

本書は97歳でご存命中の木下氏の生涯を追いながら、第二次世界大戦の惨禍とそれに巻き込まれた人々の戦後を紹介するものです。目をそむけることなく真摯に生きた一人の鉄道兵の人生は、時代の荒波に揉まれながらも人間性を失わなかった人の記録として、読む人の心を打つと思われまふ。元イギリス兵との友情、ミャンマーの人々とのご縁など、生きることの素晴らしさに満ちた本書を、ぜひ広くご紹介いただきたいと思います。